論　文

保育者がとらえる子どもの性差とかかわり方
―幼稚園教諭への質問紙調査の結果から―

How to Recognize Children's Gender and to Approach Them: From the Result of the Questionnaire to Kindergarten Teachers

梅　本　　恵
UMEMOTO Megumi

Ⅰ．問題と目的

教育においてジェンダー[1)]がどのように問題とされてきたかを、亀田（2000）は、３つの段階で説明している。第１段階は、教育の機会均等、男女共学という制度的平等を目指し、実現する段階、第２段階は、制度的平等からさらに踏み込み、学校の男女分化の内部構造や「隠れたカリキュラム」が問題となる。そして第３段階では、教育を担う教師に関する問題が焦点となる。教師自身のジェンダーに対する意識、教員養成課程や現職教育でジェンダーに関する学習がどのように行われているのかが問いなおされることになる。これらは小学校以降の学校教育を対象に、教育社会学の分野を中心に論じられてきたが、幼児教育・保育においてはどうであろうか。

2008年改定の保育所保育指針[2)]では、「子どもの性差や個人差にも留意しつつ、性別などによる固定的な意識を植え付けることがないよう配慮すること」が、保育の実施上の配慮事項として明記されている。さらに、解説書では、「性差や個人差により人を差別したり、偏見をもつことがないように」と人権面での配慮が記され、「子どもの性差や個人差を踏まえて環境を整える」と保育の方法が述べられている。さらに、保育者[3)]自身が自己の価値観と言動を省察することの必要性にも言及している。しかしながら、以上のことが、どのように保育者にとらえられ、保育の実践として具体的に展開されているのかは、未だ報告されていない。

「生涯にわたる人格形成の基礎を培う」幼児教育・保育においては、子どもの実際の経験と環境に重点が置かれており、それらを構成する保育者の役割は極めて重要である。関口（2005）が指摘するように、保育者の日常的な子どもへのかかわり方や環境構成が子どものジェンダー形成にとって重要な意味を持つのである。保育所・幼稚園における保育は、小学校以降の教科教育とは違い決まった教科書があるわけではない。子どものジェンダーに関する知識や態度は、日々集団の中で繰り返される子ども同士の相

うめもと　めぐみ（幼児教育学科）

互作用とともに、保育者の言動に大きく規定されている（佐藤ら，2003）。とりわけ、初めて幼稚園や保育所（園）という集団に参加する子どもにとって、保護者以外の大人である保育者の影響力は非常に大きいといえる。ジェンダーに対する保育者の態度・言動・意識を検討することは、子どもが性別にとらわれず自己を発揮できる保育のために重要であり、中心的な課題であると考える。

我が国において保育者のジェンダーに対する態度と意識をとりあげた研究は、筆者の寡聞のせいか多くはない（佐藤ら，2003　2004；池田ら，2005　2012；青野，2007；金子ら，2008）。その中で、青野（2007）は、ジェンダーの知識のある保育者はそうでない保育者より、子どもの性差を小さく、また後天的なものだと認識していることを明らかにしている。さらに、池田ら（2012）は、幼児教育の場では、性差に配慮するという場合、ジェンダーに配慮する場合とそうでない場合の見極めが必要であると指摘している。保育場面に現れる子どもの性差を、生物学的に規定された生得的なものとしてとらえるのか、生まれてからの働きかけによって形成されたものとしてとらえるのかによって、子どもへのかかわり[4)]が大きく変わってくるといえるのではないだろうか。そこで、本稿では、保育者の性差のとらえ方に着目する。

本稿の目的は、保育者が保育場面で現れるどのようなことを性差ととらえ子どもにかかわっているのか、現状を把握し検討することである。そのために、2012年１月～３月に実施した「保育者と子どもの性に関するアンケート調査」の、「子どもの性差のとらえ方とかかわり方」及び実際の保育場面を想定した事例の自由記述部分について分析・考察を行う。

Ⅱ．方法

１．調査対象

阪神地区にあるＳ市内の幼稚園（公立・私立）に勤務する幼稚園教諭544名（パート職員は除く）

今回の調査はまず幼稚園教諭を対象に行った。幼稚園教諭から着手した理由は、保育所保育指針には「性別による固定的な意識を植え付けることがないよう配慮すること」と明記されており、その内容が保育士に意識化されていることも予想されるが、幼稚園教諭についてはどのような実態であるのかを把握する必要を感じたからである。

２．調査時期

私立幼稚園　2012年１月下旬から２月下旬

公立幼稚園　2012年３月上旬から３月中旬

3．手続き

Ｓ市内全幼稚園（公立21園、私立40園）の園長に対して、園の教諭（パート職員は除く）全員への質問紙調査を依頼した。許可を得た57園（公立21園、私立36園）に、質問紙を園長宛てに郵送し、園長から職員への配布後、記入者が各自で直接返信用封筒にて返送するよう依頼した。

なお、調査対象の公立幼稚園についてはＳ市立幼稚園園長会に、また、私立幼稚園についてはＳ市私立幼稚園連合会に、事前に調査内容の説明と人権等への配慮について口頭での説明を行い、了解を得て調査を実施した。

4．調査内容

質問紙は、「PartⅠ　子どもの性差のとらえ方とかかわり方」、「PartⅡ　ジェンダーに対する保育者の意識」、「PartⅢ　保育場面でのジェンダーに関する問題への実際の対応」の３つのパートで構成した。

PartⅠの質問内容は、金子ら（2008）の調査項目を参考に、以下の７項目で構成した。「①男女同じようにあつかい違いや差が生じないようにしている」、「②すでにできつつある男女の差異をなくすために、意識的にはたらきかけている」、「③男女同じようにあつかうのはよいが、過剰な配慮は行わないようにしている」、「④幼児期は性別による違いを認識することが必要なので、適宜知らせるようにしている」、「⑤性別よりもその子の個性を優先している」、「⑥実際に男女の違いがある部分では、異なる対応を行っている」、「⑦男女で異なると思われるのはどんな点か」。①～⑥の回答は、「大いにそうである」「どちらかと言うとそうである」「どちらともいえない」「どちらかと言うとそうではない」「全くそうではない」の５つから当てはまるものを選んでもらった。⑦の回答は予め用意した選択肢の中から複数回答で選ぶようにした。

今回は、PartⅠとPartⅢの中から、実際の保育場面を想定した遊びの選好の事例についての自由記述の分析を行った。

Ⅲ．結果と考察

1．回収率

配布数544部、回収数は262部であった（回収率48%）。

2．回答者の属性

回答者262人中、私立幼稚園在職者は228人（87.0％）、公立幼稚園在職者数は33人（12.6％）、回答なしが１人（0.4%）であった（図１）。性別は、女性が242人（92.4%）、男性が13人（5.0%）、回答なしが７人（2.7%）であった（図２）。年齢は、20代が137人（52.3%）、30代が52人（19.8%）、40代が30人（11.5%）、50代が33

人（12.6%）、その他が10人（3.8%）で、20代が過半数を占めた（図３）。幼稚園教諭としての平均経験年数は9.3年（標準偏差8.5）で、５年未満が92人（35.1%）、５年以上10年未満が62人（23.7%）、10年以上20年未満が61人（23.3%）、20年以上30年未満が23人（8.8%）、30年以上が10人（3.8%）、無回答14人（5.3%）であった（図４）。

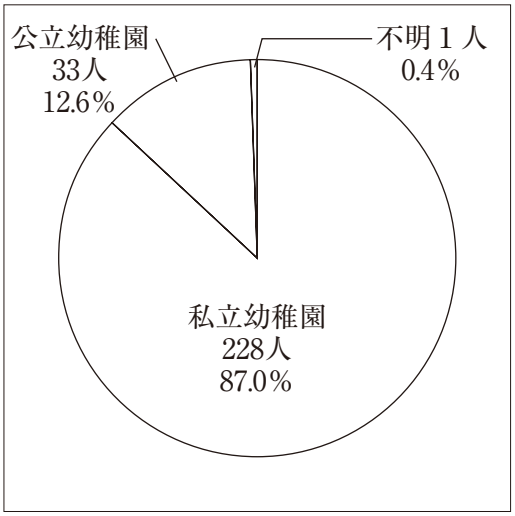

図１　職場別（公立・私立）

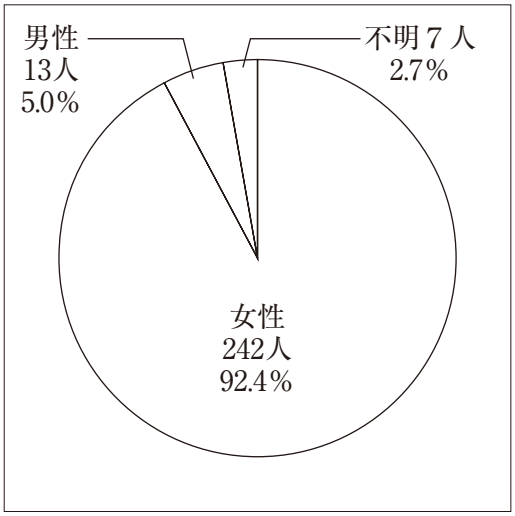

図２　性別

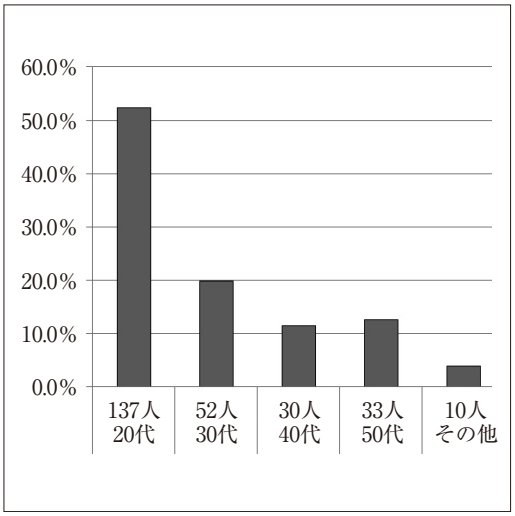

図３　年代

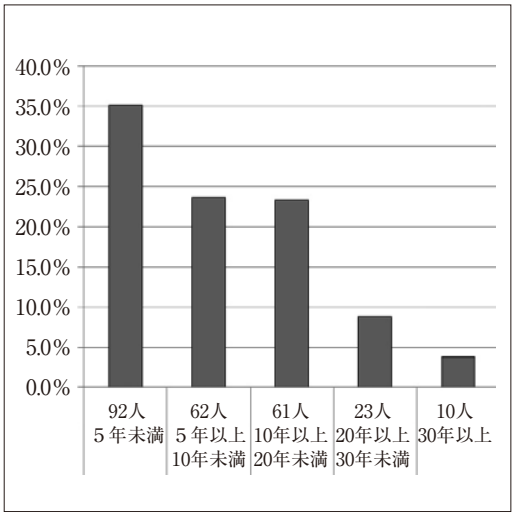

図４　経験年数

３．子どもの性差のとらえ方とかかわり方

１）子どもへのかかわり方

幼稚園教諭の「子どもの性差のとらえ方とかかわり方」に関する質問の回答結果は以下のとおりである（表１）。

「①男女同じようにあつかい、違いや差が生じないようにしている」は、「大いにそうである」が85人（32.4%）、「どちらかというとそうである」が138人（52.7%）で、合わせると223人（85%）が男女児で差が生じないようかかわろうとしていること

がわかる。「②すでにできつつある男女の差異をなくすために、意識的にはたらきかけている」は、「どちらともいえない」が116人（44.6%）で最も多く、「大いにそうである」が18人（6.9%）、「どちらかというとそうである」が94人（36.2%）であった。「③男女同じようにあつかうのはよいが、過剰な配慮は行わないようにしている」は、「大いにそうである」が67人（25.6%）、「どちらかというとそうである」が160人（61.1%）で、合わせると227人（86.7%）が、過剰にはならない程度に男女児同じようにあつかおうとしていることがうかがえた。「④幼児期は性別による違いを認識することが必要なので、適宜知らせるようにしている」は、「どちらともいえない」が113人（43.3%）で最も多く、「どちらかというとそうである」が80人（30.7%）、「どちらかとうとそうではない」が45人（17.2%）であった。「⑤性別よりもその子の個性を尊重している」は、「大いにそうである」が179人（68.3%）、「どちらかというとそうである」が75人（28.6%）で、合わせると254人（96.9%）であった。ほとんどの幼稚園教諭が、性別よりも個性重視でかかわっていることがわかる。以上のことから、幼稚園教諭は、男女児同じようにあつかい、個性を尊重するという姿勢を有していることが示唆された。

「⑥実際に男女の違いがある部分では、異なる対応を行っている」は、「大いにそうである」が47人（17.9%）、「どちらかというとそうである」が141人（53.8%）で、合わせると188人（71.7%）であった。７割を超える幼稚園教諭が男女児で違う部分があると認識し、それぞれで異なった対応を行っていることが示唆された。一方、「どちらともいえない」が54人（20.6%）、「どちらかというとそうではない」は14人（5.3%）、「全くそうではない」が６人（2.3%）であった。この回答結果を、「大いにそうである・どちらかというとそうである」「どちらともいえない」「どちらかというとそうではない・全くそうではない」の３つにグループ化し、「性別」、「職場の別（公立・私立）」、「経験年数」、「年代」との連関性を見るためにχ^2検定を行ったが、有意な傾向はみられなかった。

表１　男女児へのかかわり方

	大いにそうである	どちらかというとそうである	どちらともいえない	どちらかというとそうではない	全くそうではない	合計
男女同じようにあつかい、違いや差が生じないようにしている	85 (32.4)	138 (52.7)	33 (12.6)	6 (2.3)	0 (0)	262 (100)
すでにできつつある男女の差異をなくすために、意識的に働きかけている	18 (6.9)	94 (36.2)	116 (44.6)	25 (9.6)	7 (2.7)	260 (100)
男女同じようにあつかうのはよいが、過剰な配慮は行わないようにしている	67 (25.6)	160 (61.1)	32 (12.2)	1 (0.4)	1 (0.4)	261 (100)
幼児期は性別による違いを認識することが必要なので、適宜知らせるようにしている	11 (4.2)	80 (30.7)	113 (43.3)	45 (17.2)	12 (4.6)	261 (100)
性別よりもその子の個性を優先している	179 (68.3)	75 (28.6)	6 (2.3)	2 (0.8)	0 (0)	262 (100)
実際に男女の違いがある部分では、異なる対応を行っている	47 (17.9)	141 (53.8)	54 (20.6)	14 (5.3)	6 (2.3)	262 (100)

＊（　）内の数字は%

2）子どもの性差のとらえ方

次に、「⑦男女で異なると思われるのはどんな点か」についてたずねたところ（複数回答可）、「身体的な違い」が122人（66.3％）、「遊びなど好みの違い」が108人（58.7％）、「特性・得意なことの違い」が43人（23.4％）、「体力的な違い」が34人（18.5％）であった（表２）。この結果から、幼稚園教諭は男女児の差異を身体的な側面と遊びの側面からとらえる傾向にあることが示唆された。さらに、「性別」、「職場の別（公立・私立）」、「経験年数」、「年代」と「男女児で異なると思う点（先述した４点）」についての連関性を見るためにχ^2検定を行ったところ、「職場の別（公立・私立）」と「遊びなど好みの違い」に有意な傾向がみられた（$\chi^2=5.305$, df＝1, $p<.05$）。この結果から、私立幼稚園教諭の方が公立幼稚園教諭より、男女児で遊びの選好に違いを感じていることが示唆された。

表２　幼稚園教諭がとらえる男女児の違い

身体的な違い	体力的な違い	遊びなど好みの違い	特性・得意なことの違い	その他	合計
122 (66.3)	34 (18.5)	108 (58.7)	43 (23.4)	9 (4.9)	316 (100)

＊（　）内の数字は％

４．遊びの選好の男女差に対するとらえ方とかかわり方

さらに、下記の事例を提示し、このような場面での対応とその理由についてたずねた。回答は、「対応する」「特に何もしない」「その他」の選択肢から１つを選び、その理由を自由に記述してもらった。

事例：年長組でのことです。いくつか出された遊びの中から自分がしたい遊びを選びます。先生が、「サッカーをしたい人？」とたずねると、手をあげた６名は全員が男児でした。

回答結果は、「対応する」が46人（17.7％）、「特に何もしない」が196人（75.4％）、「その他」が18人（6.9％）であった。この回答結果と、先の「⑥実際に男女で違いのある部分では、異なる対応を行っている」の回答結果のクロス集計を行ったが、有意な関連は見られなかった。さらに、事例の回答結果と、男女児の違いを「遊びなど好みの違い」とする回答結果をクロス集計してみたが、有意な関連は見られなかった。事例は遊びの選好における男女差を示すものとして提示したつもりであるが、回答者は必ずしもそのようにとらえておらず、事例の受け止め方に違いがあるのではないかと考えられる。

事例への対応の理由については、211人（81.2％）の記述があり、無記入は49人（18.8％）であった。記述数の内訳は、「対応する」と答えたもので44人、「特に何もしない」と答えたもので150人、「その他」で17人であった。記述内容については、選

択の理由ではなくどのように対応するかという記述が大半を占めたが、両者の明確な区別が困難なため全ての記述を分析の対象とした。

記述内容の分析は以下の手順で行った。

⑴「対応する」「特に何もしない」「その他」の回答別に分類

⑵⑴の回答別に、記述全体に目を通した後、各記述が表していることをラベルとしてつけていった（例：女児への言葉かけ、女児が参加できる雰囲気作り、男女一緒に楽しむ等）。すべての記述にラベルを付けた後、内容的に類似するラベルを統合していき、それぞれのまとまりに概念名をつけた（女児へ直接的はたらきかけ、子どもの自主性を尊重する等）。

⑶各個人の回答記述は、複数の文章で構成されているものも文脈性を損なわないようそのまま分類を試みた。その中で、⑵のような明確なラベリングができない記述があることが明らかとなった。これらは、「対応する」と態度表明をしながらも、「しかし、無理強いはしない」「対応するが－中略－○○する程度」と行動に条件がつけられていたり、確固としたものではないことを表していた。また、「特に対応はしない」と表明しつつ、「一応声かけをする」「○○くらいの声かけはするかも」というように、態度の表明と行動が食い違うものもみられた。これらの、言動と信念が一致していないと思われる記述は揺らぎの見られる記述として分類し、その中でさらに内容的に類似したものを集め、概念名をつけた（女児への配慮、女児へのゆるやかなはたらきかけ等）。

１）遊びの男女差に対する幼稚園教諭のかかわり方

—「対応する」と回答したグループ—（表３－１）

事例の状況に対して「対応する」と回答したのは、46人（17.7%）であった。

子どもへの対応の仕方は、その内容から「女児への直接的なはたらきかけ」「女児への間接的なはたらきかけ」「男女一緒に楽しむ」「男女関係なく多人数で楽しむ」と、揺らぎの見られたグループは「女児へのゆるやかなはたらきかけ」「女児への間接的なはたらきかけ」に分類された。このグループは、女児の参加がないことに着目し、直接的・間接的を含めて女児に対するはたらきかけを行う傾向にあると考えられる。「男の子ばかりが参加しているのを見て、実際は参加したいのに遠慮している女の子がいるかもしれない…」と感じとり、「女の子もしないの？」と問い、「なぜ手をあげないのか聞く」という直接的な働きかけにもつながっていることが明らかとなった。

揺らぎが見られたグループの「女児へのゆるやかなはたらきかけ」は、「対応するが、女の子でもサッカーしてもいいしカッコイイね！という程度」の記述が示すように、女児への何らかのはたらきかけは行うが、強制力の伴わないゆるやかなものである。「女児への間接的はたらきかけ」は、とりあえずサッカーを選んだ６人の男児で

遊び、その姿をみせることで女児の参加を期待するというものである。一見揺らぎのないグループの「女児への間接的なはたらきかけ」と類似しているが、「遊び始めるかもしれない」という表現から、意図的なはたらきかけではないことが推察されたので揺らぎのあるグループに分類した。ここでみられた揺らぎは、サッカーを選んだ女児がいないことに着目し女児に参加を促すという行動と、それが無理強いになってはいけないという幼稚園教諭の信念との揺らぎであることが示唆された。

表３－１　遊びの男女差に対するかかわり方（「対応する」）

対応する	女児への直接的はたらきかけ	
	・女子も一緒にと言葉かけを行う	
	・女の子でやりたい子がいないか聞く	
	・男の子ばかりが参加しているのを見て実際は参加したいのに遠慮している女の子がいるかもしれないことを考えて女の子にもう一度言葉かけをする	
	・女の子にも声かけをしてなぜ手を上げないのか聞く	
	女児への間接的はたらきかけ	
	・教師も一緒に遊び、女児も一緒に遊べる雰囲気作りをする	
	・サッカーをしたい女の子が男の子の輪に入れないのであれば保育者も一緒に行い誰でもはいれるよう配慮する	
	・女の子もしないの？と問い、自分もサッカーをする	
	男女で楽しむ	
	・サッカーは男女ともに楽しめるので一緒に遊ぶ	
	・男女一緒にスポーツを経験できる時期（小学校低学年頃まで）を大切にしたいから	
	多人数で楽しむ	
	・男児がというよりもっと多人数でサッカーをしたいと思ったから	
	・教師も一緒にサッカーし、おもしろさが周囲の友だちに伝わるようにする	
	その他	
	・女性のサッカー選手も多くなり非常に活躍しているため	
	揺らぎ	女児へのゆるやかなはたらきかけ
		・女の子にも興味を持ってもらえたらと思い声かけはする
		・対応するが、女の子でもサッカーしてもいいしカッコイイね！と言う程度
		・無理には強要しないが、女性のサッカー界の活躍の話をしたり、女児も興味を持てるよう言葉かけをする
		・女児にも聞く（遠慮したりはずかしがったりしているかもしれないから）しかし、無理強いはしない
		女児への間接的はたらきかけ
		・その男児6名とサッカーをしていたら見ていた他の子ども（女児）も興味を示し、遊び始めるかもしれないから
		・最初はその6名でサッカーを始める。その時に手を挙げていなかった子については「いつでも入ってきていいからね」と伝える

２）遊びの男女差に対する幼稚園教諭のかかわり方

―「特に何もしない」と回答したグループ―（表３－２）

事例Ａの状況に対して「特に何もしない」と回答したのは196人（75.4％）で、最も多くの幼稚園教諭が選択した行動である。子どもへの対応の仕方は、「したい遊びに男女は関係ない」「子どもの自主性を尊重する」「活動の種類と意図による」と、揺らぎの見られたグループは、「女児への配慮」「男女関係なく遊べる機会の設定」に分類された。「したい遊びに男女は関係ない」は、子どもたちがしたい遊びを選んだらたまたま男児ばかりであっただけで、そこに性差は存在しないというとらえ方である。「子どもの自主性を尊重する」は、遊びを子どもが自主的に選んだかどうかということに重点を置くもので、どのような遊びを選んだのかは問題とされない。「遊びの種

類と意図による」は、幼稚園教諭の意図によってその都度対応は異なるが、本事例の場合は子どもがしたい遊びを選ぶ場面ととらえられるので、特にはたらきかけは必要ないというものである。

揺らぎが見られたグループの「女児への配慮」は、サッカーを選んだのがたまたま男児だけであったとみなし特に対応は必要ないとしながらも、「女の子ではいないの？程度は聞くかもしれないが…」というように女児に配慮し、何らかの対応を行うとしている。「男女関係なく遊べる機会の設定」は、子どもたちが自分から選んだ好きな遊びなのでそのまま男児だけで遊ばせるとしながらも、一方で男女関係なくいろいろな遊びを経験できる機会も必要であるというものである。これらの回答から、対応しないと表明しつつ対応するという２つの異なった行動の間での揺らぎであることが示唆された。

表３－２　遊びの男女差に対するかかわり方（「特に何もしない」）

特に何もしない	したい遊びに男女は関係ない	
	・遊びは自由であり、たまたま全員が男児だけだったというだけなので	
	・自分がしたい遊びを選ぶ場合は特に男女は関係ないから	
	・その子どもたちのやりたいことを性別でなく個性による思いとして受け止めているので	
	・無理に「女の子もしようよ！」という必要もないと思うから	
	子どもの自主性を尊重する	
	・その子どもが選んだものを尊重する	
	・自主性を尊重する、やりたい遊びを選択する、選べばよいと思う	
	・したい遊びについて強要するようなことや意図は必要ないと感じるから	
	活動の種類と意図による	
	・特に条件を出した訳ではないので希望した者だけで遊ばせる	
	・全員男児であろうが女児であろうが構わない。しかし、その時の配慮の意図による。「多勢で行いたい」「男女の交流をもちたい」などがあれば別である	
	・クラス全体での活動ならば男女分けずにサッカーを進めるが、自由遊びならば特に配慮はしない	
	揺らぎ	女児への配慮
		・たまたま男児だけだっただけ。「他にやりたい子はいない？」くらいの声かけはするかも
		・自分で選んだ遊びだから。「女の子ではいないの？」程度は聞くかもしれないが…
		・女の子も入ってよーなど声はかける、
		・「女の子がしてもいいよ」と一応声かけをする
		・今日は男児のみであるが別の日女児が参加する可能性もある
		・女の子が見ていてしたくなったら誘えばよいのではと感じるので、子どもたちの意志に任せる
		・サッカーをしたそうにしているが入れない女の子がいれば対応しますが、サッカーをしたければ女の子でも途中から入ってくるので特に女の子を入れようとはしません
		・見ていて後で自然と女児で参加したい子どももでてくるかもしれない
		男女関係なく遊べる機会の設定
		・好きな遊びは好きな遊びなので。ただしサッカーなども全員で遊ぶ機会は持つようにしています。いろいろな遊びを経験したうえで好きな遊びを選ぶことができるようにしたいと考えます
		・自主的に幾つかある環境の中で子どもたちが自分から選んだことである。たまたま6人全員が男の子であったが、男児も女児も関係なく子どもたちが自主的に入ってこれるような環境づくりはしていきたい
		・したい子どもがすればよい。また別の日に他の子どもも経験できるようにしたり、まずは自分のしたい遊びが十分にできることを優先させる
		・今回はそのままやりたいことをやらせ継続していく中で徐々に声をかけたり話し合いの場を設けます
		・他の子（女児も含む）も入りたくなるように楽しく遊ぶ

３）遊びの男女差に対する幼稚園教諭のかかわり方

―「その他」と回答したグループ―（表３－３）

事例Ａの状況に対して「その他」と回答したのは、18人（6.9％）であった。子どもへの対応の仕方は、「女児への直接的はたらきかけ」「活動の種類と意図による」と、

揺らぎの見られたグループは、「女児への配慮」「男女関係なく遊べるようなはたらきかけ」に分類された。「女児への直接的はたらきかけ」は、先述した「対応する」と答えたグループと同様であった。

揺らぎが見られたグループの、「女児への配慮」も、先述の「特に何もしない」グループのそれと内容的には一致するものであった。「男女関係なく遊べるようなはたらきかけ」は、「その場では何もしないが―」「とりあえずそのままのメンバーで行い―」というように、保育者の行動の変化の可能性を示唆するものである。

表３－３　遊びの男女差に対するかかわり方（「その他」）

その他	女児への直接的はたらきかけ	
	・女の子もやってみないかと誘ってみる	
	活動の種類と意図による	
	・クラス全体で楽しみたいと思う機会であれば他児にも声をかける	
	揺らぎ	女児への配慮
		・その場は特に何もしないが、もしやりたかったけど手をあげられなかった女の子がいて表情や行動でわかれば個人的に誘ってみる
		・自分がしたい遊びをするのであれば特に何もしないが、女の子にも「やらない？」と少しずつ誘いかける
		・女の子にも声はかけると思います。サッカーを苦手とする子にも声をかけていきたい
		男女関係なく遊べるようなはたらきかけ
		・男児だからとこだわるのではないが他にもしたい子がいないかは話す
		・その場では何もしないが色々な遊びに触れて楽しさを知るという意味で折をみて個々にはたらきかける
		・もしサッカーをすることになったらとりあえずそのままのメンバーで行い、興味を持てるように誘いかける

Ⅳ．総合的考察

本稿の目的は、幼稚園教諭が保育場面に現れるどのようなことを性差ととらえ子どもにかかわっているのか、その傾向を把握し検討することであった。

１．幼稚園教諭は、保育場面で見られる子どもの性差を、身体的な側面と遊びの側面からとらえていることが明らかとなった。保育者が日々保育の中で出会う男女の差異について当たり前のものとしてとらえるのか、社会的・文化的に異なる働きかけを受けた結果ととらえるのかで、男女児へのかかわり方は大きく変わってくると考えられる。遊びや好みの違いを固定的にとらえ、その子が好んで行っているからといって「女（男）の子の遊び」の他に選択肢を準備しないと、その子の経験は限定されたものとなってしまうだろう。本調査では、幼稚園教諭が実際にみられる男女児の差異をどのようにとらえているのか、また、異なる対応とはどのような内容なのかは明らかになっていない。今後、保育の中でみられる性差についてどのようにとらえ対応しているのか更なる検討が必要なことが示唆された。

２．幼稚園教諭は、遊びの中で見られる男女児の差異に気付き、明確な意図をもってはたらきかけている一方で、揺らぎながらかかわっていることも明らかとなった。それは、遊びの選好にあらわれた男女児の差異に対して解消する方向ではたらきかけること

と、子どもの自主性を尊重するためには無理強いをしてはいけないという自らが有する信念の揺らぎとしてとらえられる。また、事例の状況を男女児の差異としてとらえていないが、女児に対して何らかのはたらきかけをするという、「何もしないと言いながら何かする」揺らぎの状況も見られた。保育実践における文脈と状況が事例だけでは読み取りきれないものの、この一見矛盾する行動の背景には、女児が参加していないことへの保育者としての何らかの問題意識が生じているのではないだろうか。池田（2006）が指摘するように、子どもたちの一見「自由な」遊びの中での「自然な」姿も、「なぜ男女で分かれているのか」という問いが生じると、保育者の子どもへの働きかけと環境構成は男女児で一緒に体験できるものへと変わっていくはずである。それが、子どもたちが性の違いによる固定的な観念にとらわれず、自分らしさを大切にしながら個性や可能性を発揮できるような保育実践へと結びつくのではないだろうか。

【注】

１）加藤（2006）によると、ジェンダーという語には、大きく４つの用法がある。①性別そのもの、②自分の性別が何かという意識（ジェンダー・アイデンティティ、性自認）、③社会的につくられた男女差（ジェンダー差）、④社会的につくられた男女別の役割（ジェンダー役割、性役割）である。本稿では、個人の生物学的な性別（SEX）に対して、ジェンダー（gender）を社会的、文化的につくられた性として③④の意味で用いることにする。

２）1999年改訂の保育所保育指針では、男女共同参画基本法の成立を背景として、「子どもの性差や個人差にも留意しつつ、性別による固定的な役割分業意識を植え付けることのないよう配慮すること。」（第１章総則１保育の原理（２）保育の方法）と明記された。この項目は、2008年の改定でも「保育に関わる全般的な配慮事項」として引き継がれ今日に至っている。

３）「保育者」とは、保育用語辞典（2013）によると、広義には保護者や幼稚園・保育所の全てのスタッフを包含する言葉であるが、狭義には、幼稚園や保育所で直接子どもの保育に携わる者をさしている。したがって、本稿では、「保育者」を、幼稚園教諭と保育所保育士とを総称する意味において用いることとする。

４）保育者のかかわりに焦点をあてた研究に、幼児の前偏見的言動への援助方法を検討した日浦（2006）の論考があげられる。その中で、「援助」「はたらきかけ」「誘導」「意図的かかわり」「教育的援助」という言葉が頻回に使用されている。本稿では、これらの言葉をすべて含むものとして「かかわり」という言葉を使用する。

【引用文献】

青野篤子　2007　男女平等とジェンダーに対する保育者の意識　福山大学人間文化学部紀要７，65－79.

日浦直美　2006　幼児期の多文化・多様性に関する一考察－幼児の前偏見的言動に対する「相互的方法」の民族誌的分析－　乳幼児教育学研究15，65－83.

池田政子・高野牧子・阿部真美子・沢登芙美子・池田充裕　2005　ジェンダーに向き合う保育専門職の養成　保育学研究43⑵，245－255.

池田政子 内海崎貴子 岡明秀忠 蔵原三雪　2012　ジェンダー平等保育／教育の教育実践と大学で受けた授業科目との関連－大学でジェンダー関連科目を受けた教職員のインタビュー調査から－日本教師教育学会第６期・第７期課題研究（2007～2011年度課題研究）「教師教育におけるジェンダー視点の必要性」報告書　95－154.

亀田温子　2000　ジェンダーが教育に問いかけたこと　亀田温子・舘かおる 編著『学校をジェンダー・フリーに』 明石書店　24－36.

金子省子　青野篤子　2008　ジェンダーの視点で捉えた保育環境と保育者のジェンダー観　日本家政学会誌59⑹，363－372.

加藤秀一　2006　ジェンダー入門　朝日新聞社　23－35.

厚生労働省編　2009　保育所保育指針解説書　フレーベル館

森上史朗他（編）2013　保育用語辞典第7版　ミネルヴァ書房　182.

佐藤和順　田中亨胤　2003　幼稚園教師の意識変化に着目したジェンダー・フリー・プログラムの効果－教師スタンスの分析を手がかりとして－　保育学研究41⑵，200－209.

佐藤和順　田中亨胤　2004　生活史的アプローチによる幼稚園教師のジェンダー観の揺らぎに関する研究　乳幼児教育学研究13，37－50.

関口はつ江　2005　課題研究報告2004年公募「子育てとジェンダー」 保育学研究43⑵，130.

【付記】

本論文は、関西教育学会第64回大会において発表したものに加筆・修正したものである。

（平成26年10月30日受付、平成26年11月14日受理）